

男子保育学生在学による影響について

——特に女子学生の男性保育者に対する意識の分析を中心に——

井 村 圭 壮

(南海保育専門学校)

Ⅰ、はじめに 保育現場（保育所・幼稚園）に男性保育者が登場し、女性との協働による保育が展開されることにはいかなる意味が存在するのであろうか。今回の発表は、男性保育者の登場によって生じる様々な影響を、養成校における女子学生の意識から分析することによって、今後期待される男女協働による保育のあり方を考察する上での検討資料を作成することを目的とする。

Ⅱ、調査対象・方法 調査対象は男子保育学生を入学させている南海保育専門学校保育科の女子学生＝A群と、男子学生は入学させていない香川短期大学幼児教育科の学生＝B群である。調査方法は集合調査で、調査当日授業に出席した学生に質問紙を配布した。有効回収数はA群311、B群208である。調査時期はA群が1983年7月13日から19日でB群が同年11月20日から26日である。

Ⅲ、調査結果 1、基本的属性 A群にはⅠ部とⅡ部があり、Ⅰ部249、Ⅱ部62。B群にはⅠ部とⅢ部があり、Ⅰ部125、Ⅲ部83。年齢は両群とも19歳が最も多い。なお、A群には調査時に47名の男子が在学しており全体の9.1%にあたる。

2、A群とB群との比較分析 ここでは紙数の関係上 χ^2 両側検定の結果、有意差のあった質問項目・選択肢のみを取り上げる。※※※は $P<0.001$ 、※※は $P<0.01$ 、※は $P<0.05$ 、+は $P<0.1$ とする。(1)「男性が保育者をめざそうとするとき障害になると思われるもの」(MA) A群ともに「保育は女性の仕事とする考えが強いこと」が52.1%、72.1%で最も多い。ただ、A群は「給料が安いこと」「労働条件が悪いこと」を選ぶ者がB群に比べて有意に多くなっている。(2)「男性保育者に正式な職名をつける場合」両群とも「保父」が一番多くなっている。ただ、A群は48.2%であるのに対し、B群は72.6%とB群の方がかなり高い割合を示している。A群では「保育士(女性も含めて)」24.6%と「児童指導員(男性のみ)」17.2%を選ぶ者がB群に比べて有意に多くなっている。(3)「男女保育者間の体力的な差」A群では「あると思う」と答えた者が70.0%であるが、B群では58.7%と低くなっている。このことは、A群

の学生が男子学生と実習などの活動をともにこなうなかで感じ取ったひとつの結果であろう。(4)「保育所で男性保育者が乳児の保育を担当すること」両群とも反対群が最も多い。ただ、A群の反対群は40.8%であるのに対し、B群は51.9%と有意に多くなっている。(5)「保育所で男性保育者がおしめを取りかえること」A B群とも賛成群が一番多くなっている。ただ、A群は51.8%であるのに対し、B群は43.0%である。B群は反対群も35.3%と多くなっている。(6)「男性保育者が保育室や職員室で花をいけること」A群は「してもしなくてもどちらでもよい」という中立群が52.4%で最も多い。B群も中立群が一番多いが38.0%である。B群はA群にくらべ反対群、賛成群の両方とも有意に多くなっている。(7)「男性保育者就任の際の不安」「あなたが将来保育所保育母になり、もしあなたの保育所に男性保育者が就任することになったら」という質問で、表2に示す項目に対し「不安を感じる」「不安は感じない」「わからない」の選択肢によってたずねてみた。A B群間には表2に示すような有意差がみられ、「職員との人間関係」「男性の一般的特性(おおざっぱさなど)」「園内の雰囲気」において、特にB群に「不安を感じる」と答える者が多くなっている(図1参照)。(8)「男性保育者に対する期待」「あなたは男性保育者に対して期待することがありますか」という質問で、表3に示す項目に対し「期待することがある」「期待することはない」「どちらともいえない」という選択肢によってたずねてみた。両群間には表3に示すような有意差がみられ、特にB群において「期待することはない」と答える者の割合が高くなっている。(9)「保育所で男性が保育にたずさわること」A B群とも賛成群が最も多いが、B群の賛成群が61.1%であるのに対し、A群は78.2%と有意に高い割合を示している。B群では「いてもいなくてもどちらでもよい」と答える者が32.2%とA群よりも有意に多くなっている。

Ⅳ、考察 (1)で述べたように、A群においては男性が保育者をめざすときの障害として「給料が安いこと」「労働条件が悪いこと」の選択肢を選ぶ割合がB群に比べて有意に多くなっていた。このことからA群の

表 / 保育所で男性保育者が

おしめを取りかえること (人数・%)

	A 群	B 群	P
すべきでない	6.9 / 22.2	7.3 / 35.3	※※
どちらでもよい	5.8 / 8.6	4.0 / 9.3	
する方がよい	16.1 / 51.8	8.9 / 43.0	+
わからない	2.3 / 7.4	5 / 2.4	※
$\chi^2 = 15.470$ df=3			※※

表2 男性保育者就任の際の不安 (A B 比較)

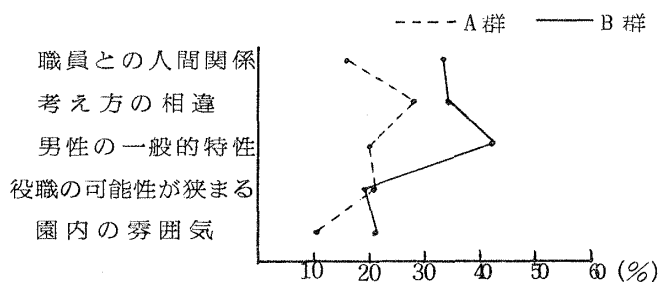
職員との人間関係	※※※
保育目標・指導などの考え方の相違	+
男性の一般的特性 (おおざっぱさなど)	※※※
役職の可能性が狭まる	
園内の雰囲気	※※※

表3 男性保育者に対する期待 (A B 比較)

音楽リズムの指導	※
遊具や教材その他のものの修理	
男の子の指導	
体力	
しつけや生活指導	※※※
運動遊びなどの指導	※
日常の介助 (介護) や世話	※※※
父親的な役割を担うこと	
男女協働による保育ができること	※
男性の行動力や判断・思考力	

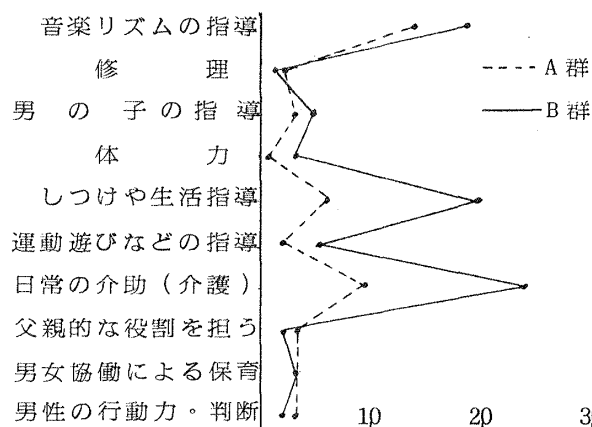
女子学生は、日ごろ男子学生と生活をともにするなかで彼らのぶつかる将来の経済的、社会的問題を少なからず現実のものとして自覚しているのではないかとということが考えられよう。そして、このことが男性保育者の職名を考える際、「保育士」や「児童指導員」といった保母の社会的地位とは別の専門職的地位を考える契機になっているのではないだろうか。(4・5・6)は保育現場における性別分業観に関してたずねたものであるが、どの設問においてもB群に性別分業を肯定する学生が多いという結果がでていいる。例えば、「保育所で男性保育者がおしめを取りかえること」に対し反対する者は、A群で22.2%であるがB群では35.3%と有意に高い割合を示しており、おしめ交かんは女性の方がよいとする性別による分業を主張する学生がB群に多いという結果がでていいる。次に、(7)「男性保育者就任の際の不安」についてみてみると、全般的にB群の方が「不安を感じる」学生が多く、特に「男性の一般的特性」に不安を感じていいることがわかる。つまり、B群の学生は男性保育者の性別的側面を特に

図 / 男性保育者就任の際の不安 (A B 比較)



上図は「男性保育者就任の際の不安」の質問項目で「不安を感じる」の選択肢を選んだ割合を示している。

図2 男性保育者に対する期待 (A B 比較)



上図は「男性保育者に対する期待」の質問項目で「期待することはない」の選択肢を選んだ割合を示している。

意識する傾向があり、このことは、「男性が保育者をめざすときの障害」に関して「保育は女性の仕事、、」や「男性がほとんどいないので、、」を選ぶ割合がB群に有意に高いという結果からも推察されよう。

V、展望 (1)A群の女子学生は男子学生とともに学び生活するなかで男性保育者のおかれた厳しい経済的、社会的現実をいくらか直視していいるようであり、女子学生のこうした見方が保母としての自分自身の社会的地位や身分を考える際の契機になってくるのではないだろうか。(2)A群の女子学生に男性保育者のおしめ交かんを否定する者が少ないことからわかるように、女子学生は男子学生とともに学びあうなかで自分自身のなかにあるステレオタイプ化された性別分業観を徐々にうすめていくのではないだろうか。

参考文献

- 岡田正章・松下知弘「幼児教育と男性保育者」宝仙学園短期大学紀要Ⅳ
- 庄司洋子「保育と性役割 (1)」東京都立高等保育専門学院紀要第2号、1979
- 井村圭壯「男子保育学生の実践に関する意識について」全国保母養成協議会第22回研究大会論文集